

鹿児島県医療法人協会立看護専門学校自己点検自己評価
～令和元年度まとめ～

1. 本校における自己点検・自己評価についての取り組み

本校では、平成30年度の学校自己点検自己評価結果を受け、令和元年度の重点目標に「学生支援の向上」と「職員の自己研鑽」を掲げ、特に教職員間の共有連携をスムーズに行うことと、学生の自己学習能力を高めること、社会人基礎力を高めることを強化した。年度末に活動目標に沿った各自の教育実践や業務を振り返るとともに、学校評価を実施し評価報告書としてまとめた。

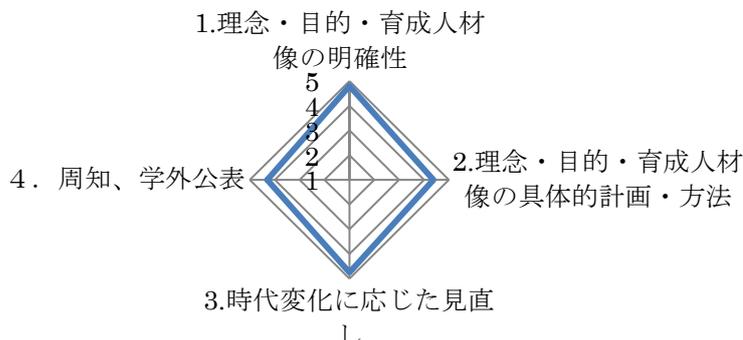
2. 自己点検・自己評価結果（令和元年度）

以下は大項目（I～X）毎にその平均値を図に示した。次に、各領域について評価された数値を点検項目別に集計し平均値を出し、振り返りを行った。



教育理念・目的 育成人材像

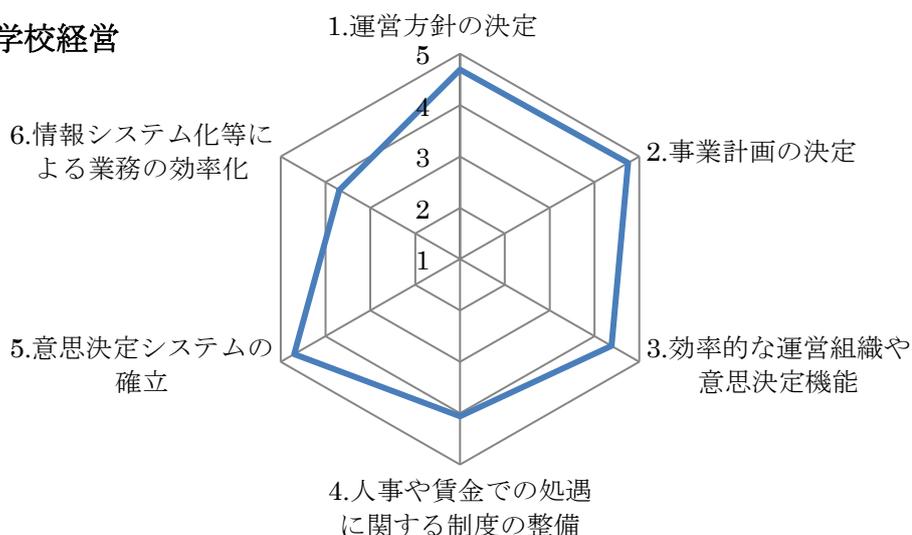
— 令和元年度



本校は、対象を「いきる（生・活）」存在として捉えることを理念の中心に位置付け、幅広い人間理解を基に地域に根差した看護を実践できる人材育成を目指してきた。令和元年度後半から開始したカリキュラム検討会では、全教員で学校が目指す方向を再確認した。第5次カリキュラム改正の趣旨は地域で生活するすべての人を対象に看護を実践し活躍できる能力育成であり、本校の理念とのつながりを実感することができた。

学校経営

— 令和元年度

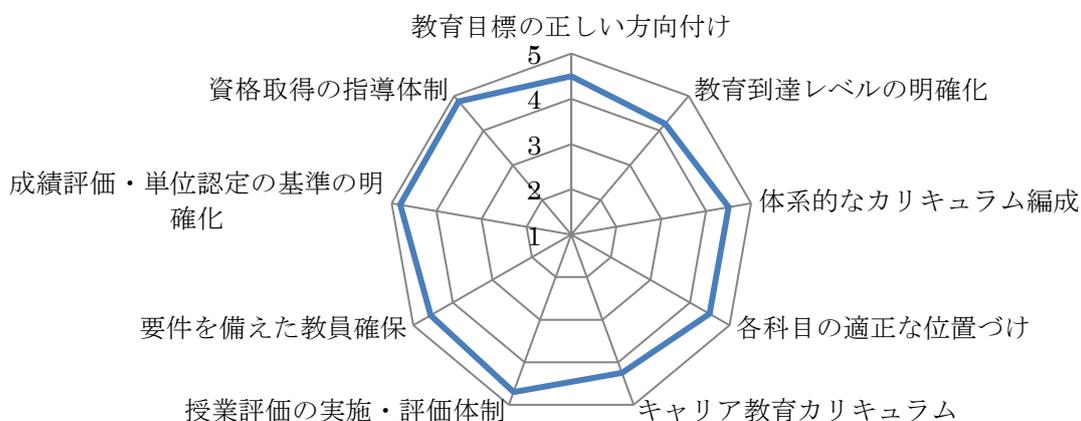


本校の設置主体である一般社団法人鹿児島県医療法人協会の事業に鹿児島県の看護職人材育成がある。この事業を看護師養成所指定規則に則り学校運営方針、組織図、年間事業計画を定め運営している。今年度も学校運営会議・職員会議・教務会議・各係り会議等を定期的に開催した。組織の業務分掌は、全員が実践と照らして見直し意思決定ルート、責任、効率性について確認した。実践過程では、煩雑さが増す中で、各会議の時間確保、突発的な決定事項の共有が、継続する課題となった。

学校業務の情報システム化は、機器の購入など進めているが、一元管理した学習支援システム活用に至っていない状況であり、引き続き改善に努める必要がある。

教育活動

令和元年度

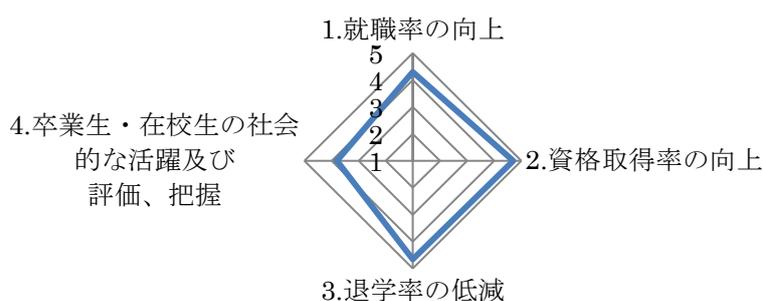


本校の教育目標・育成人材像は、地域の人材ニーズに向けて方向付けられていると考える。授業要項にはカリキュラムの全体構想から各科目の位置づけまでを見直し明記した。

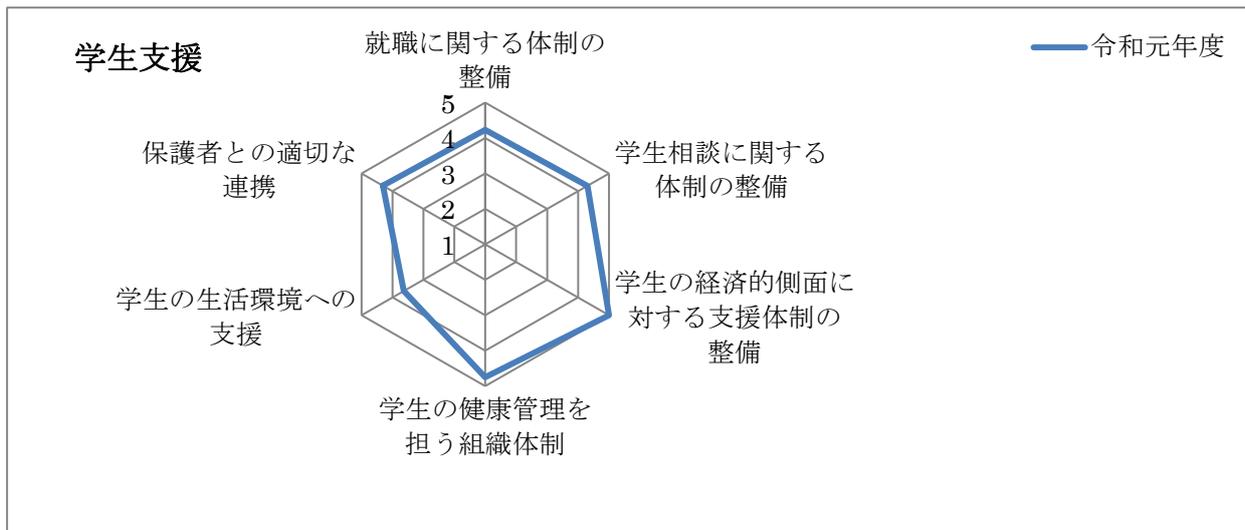
カリキュラムの見直しの度に、看護実践力を培う実習教育やシミュレーション教育を強化してきたが、キャリア教育としての実効性を卒業生、就職先病院などを通して検証していく必要がある。教員の毎回の授業評価と年度末の振り返りは、育成目標に向け授業を行うことにつながっていると考える。成績評価・単位認定の基準は明確であり、資格取得の指導体制は低学年から行った。

教育成果

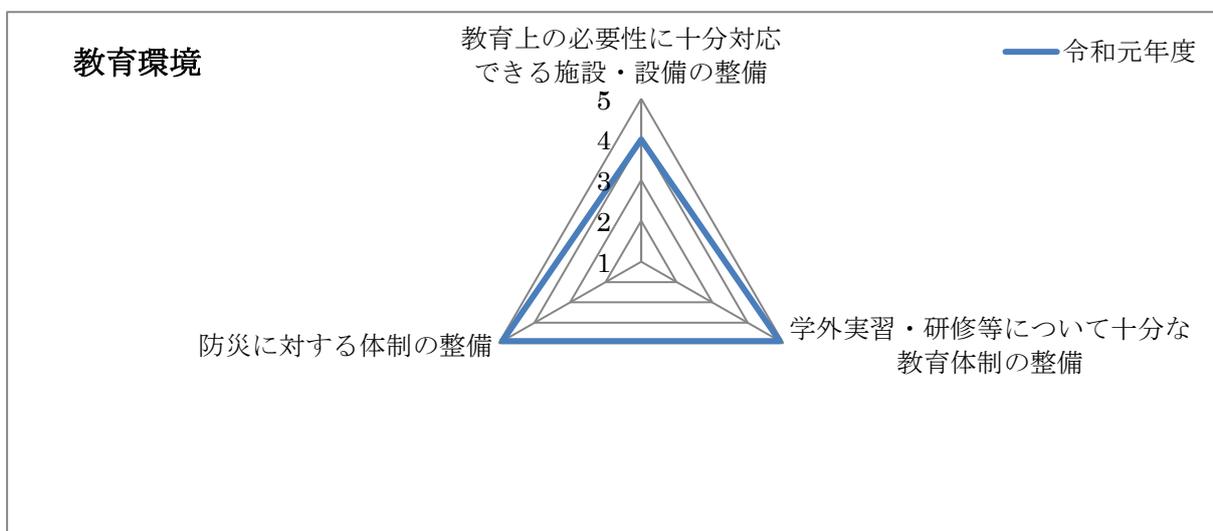
令和元年度



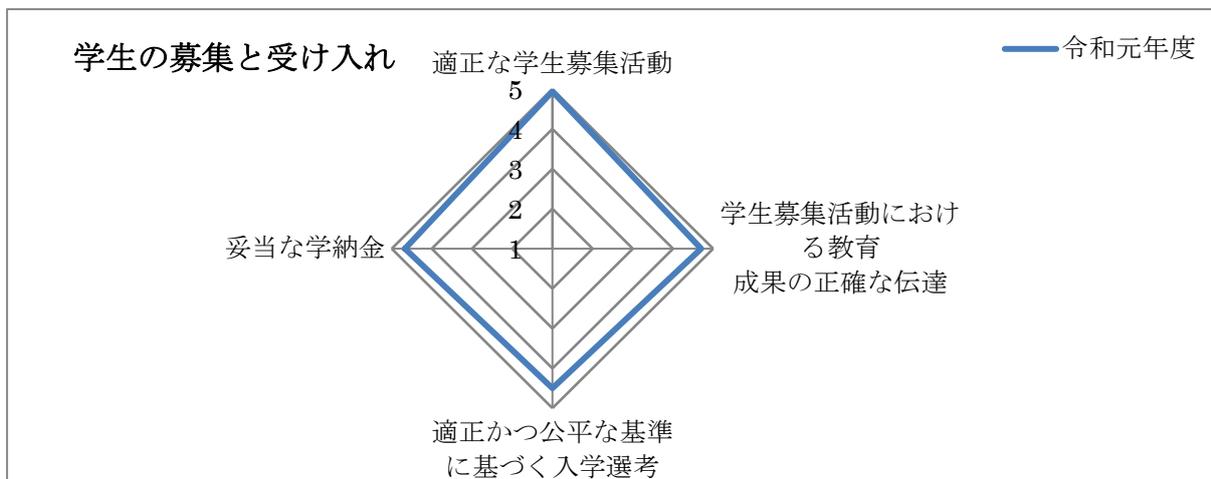
過去3年間の卒業生就職者数・就職率データによると、鹿児島県内就業の卒業生を多く輩出し就職率の維持向上が図られている。卒業後來校する卒業生との交流を継続し活躍を身近に触れることができるが、就職成果とその推移に関する情報を明確に把握できればと考える。資格取得率は過去3年間のデータによると全国平均の取得率を維持している。



進路相談室での最新の就職情報閲覧、病院説明会の実施、就職に関する個別相談を実施した。学生相談については、学年担当と3学年縦割り少人数担当教員を置く体制を継続した。スクールカウンセラーにつなぐ体制も整え利用する学生もいた。奨学金制度、学費の分納制度に加え職業実践訓練給付金制度、高等教育の就学支援制度を整えており、活用する学生が増えており、学習に専念できる支援につながっていると考える。しかし、学生の生活環境への支援は教職員の評価が高くないことを踏まえ学生のニーズも捉えつつ改善を図っていく必要がある。保護者との連携は、主に成績不振、単位未修得の学生について早め早めに行い対応できていた。

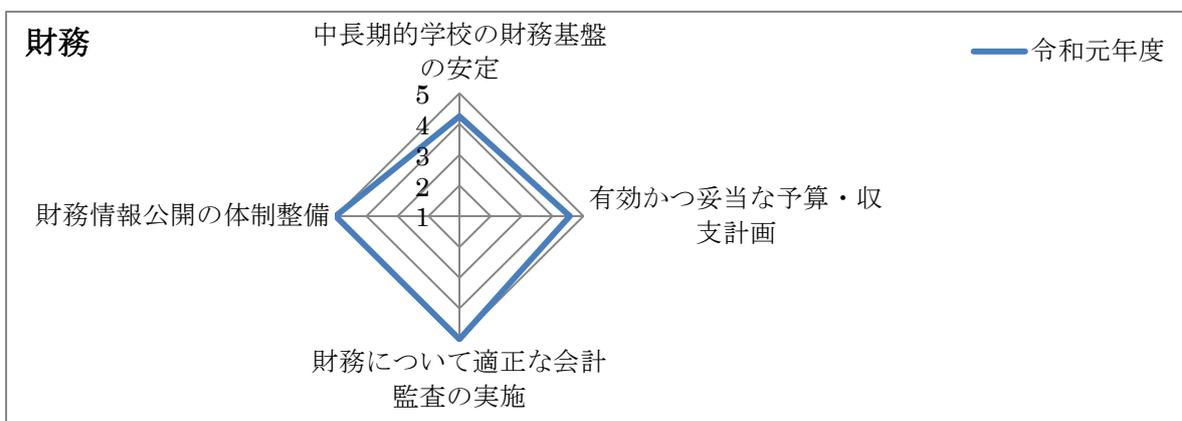


施設・設備の安全点検を偶数月に行い整備するとともに更新に関する計画を立てた。学外実習を行う関係機関と連携し、教育体制を整備した。臨地実習の成果が就職施設を希望するきっかけになった学生もいた。大学生との協同学習である解剖学研修も効果的であった。実習時等の事故や災害対応の保険では、感染予防のために適応になった学生がいた。このような環境を整えているが、常に教育上の必要性を検討しながら管理していきたい。



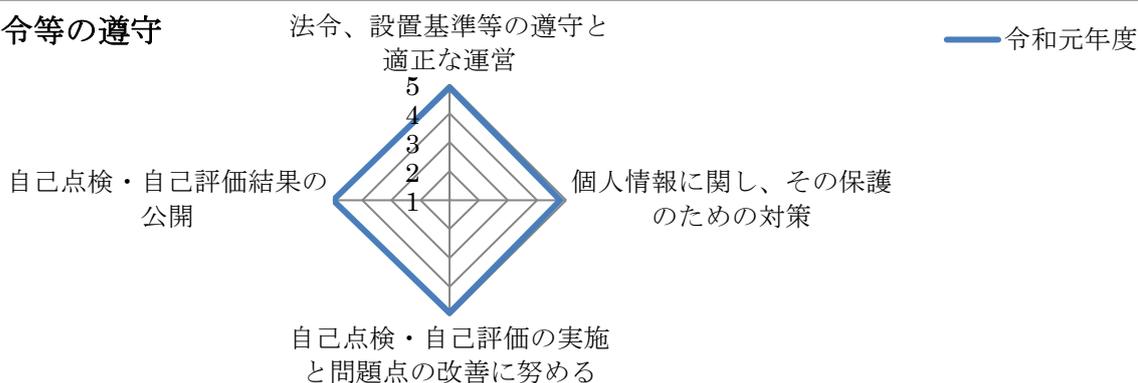
学生募集活動は、学校説明会・高校訪問・オープンキャンパス・進学ガイダンス参加等を継続し、志願者等の問い合わせや見学希望にも応じた。教育成果として就職実績、資格取得実績を数値化して伝えた。また、卒業生の活躍等具体的に伝えることができ、学生募集に大きく貢献しているといえる。学納金は実習施設の実習費が上がっているが、学生および保護者の負担感を考慮し、同額としている。

入学者の選抜に関しては、平成30年度は直前の辞退者による欠員があった。令和元年度は推薦・社会人、一般Ⅰ～Ⅲ期の試験によって定員以上になった。選抜方法は適正であったが定員の遵守には努めていきたい。



年度予算、中長期計画が、目的・目標に照らして立てられており、計画に従って執行されていることを設置主体の総会で承認された。過去3年間の看護専門学校資金収支計算書、消費収支計算書、収支予算書が明示され、財務状況の監査を受けている。事務窓口では財務情報公開している。職務分掌や、組織体制も年度ごとに見直されているため、行政機関における経営的立場では健全に管理運営されているといえる。

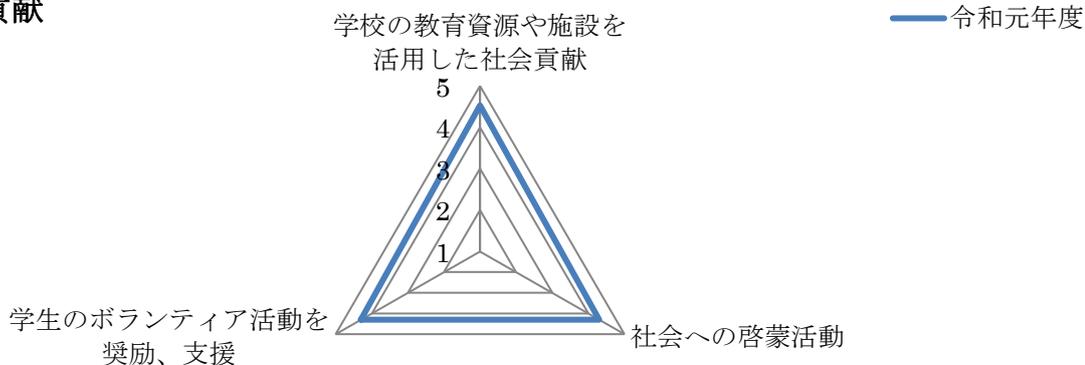
法令等の遵守



看護師養成所指定規則や専修学校設置基準等を遵守した運営を行い、教職員・学生等にも周知した。個人情報に関し、周知していても行動化が伴わないこと（SNSの使い方）も発生し、個人及び全学生の省察に時間をかけた。定員超過に対して、演習・実習環境に支障をきたさないよう整備した。

学校自己点検・自己評価の時期・方法・結果の公表までの取り組みは、定着してきた。今年度は学校関係者評価を実施し公表まで実施できた。今後も多方面からの評価を基に問題抽出、解決につなげるように継続していきたい。

社会貢献



今年度から、地域のネットワーク会議に参画することで教育機関、校区との連携・交流のきっかけづくりとなった。看護学演習の模擬患者役には地域の方の協力を継続して得られ、看護学生がリアルな演習を通して自己の実践を振り返る貴重な学習体験となっていた。

県の委託事業、看護協会主催の事業における協力要請に対し、学内の協力体制を整え教員を派遣した。このことは教員のキャリア別の自己研鑽につながっていると考える。

3. まとめ

令和元年度は、授業評価、業務評価、卒業時の学生のカリキュラム評価に加え、学校関係者評価を行い教育目標に対し肯定的な評価を得た。年度末には教育目標に対するラベルワークを行って学生の現状と課題を検討した。この結果は第5次カリキュラムの編成に反映させるとともに、次年度の学校運営や教育活動に活かしていくつもりである。